

眞 生

第八卷 十一月號

□ 愆今年も十一月となりました、燈下親しむべしと言つた秋の日ももうあこ承い
こでない。今年もあます所は僅かである。道友の人々よ、今私たちは何を考
へ何を行いつゝあるであらうか。

□ 来る年も来る年も、今年こそはと思ふ人は甚だ多い、乍然それが過ぎてのち今
年はよかつたと思ふに云い得る人が幾人であらうか。一年の過ぎたのは一年の命
が過ぎたのだ、一年の命を失つて、之に値いする何者を私共は得たのであらう
か。

□ 一度過ぎてまたと歸らぬは實に人生である。友よ之こそは實に千古の事實であ
らう。一日の過ぐるのも、一年の過ぐるのも、一日一年の過ぐと思へば何事も
ないのであるが、それが直に自分の命が過ぎるのであつて、一度過ぎてまたと
歸らぬ生命と思ふとき、一生を無事に過ぎた位では、之を喜ぶわけには行かま
い。

□ 思へば今年も己に秋の半は過ぎた。今年の終るのももうすぐである。冬の日も
秋の日も、日そのものに變りはないが、かうして人生の一生を思ふとき、眞に
私共は此の世に生くべき價値の生活を思はねばならない。

□ 然は價値の生活とは何であらうか、それは永生と向上との生活の外に人生の眞
に生くべき道はない。永生とは不死の自覺であり、向上とは價値の生活であ
る。謂かへれば天地と共なる眞人の生活であるのだ。

□ 友よ、我等は如何に生くべきか、徒なる徒衣と徒食とは決して私共の本意では
ない。

ぬけ殻

私が料理屋に居た頃、鰻の飼つてある溜めの栓を、さうしたものか確り詰めて置かなかつたと見えて、皆な溝の中へ逃がらしかして大騒ぎをしたことがあります。その時「居りもせぬ」街の溝の中に、鰻の踊つて居ることを本當に不自然に、滑稽にも感じ乍ら、一生懸命に捕へたことでした。

「居りもせぬ處に居り」、「有りもせぬ處に有る」皮肉を此の鰻と共に時々痛切に感じます。信仰の鰻も居るべきお寺から遁げ出して、街の溝の中、裏長屋でビチ／＼躍つてゐる。「こんな處に居る／＼」と捕へようとするが仲々捉らまらぬ。そして益々皮肉に逃げて行つて、あちらから嘲笑つてゐるようにも思ひます。

大商店が見榮は立派でもすつかり行詰つて四苦八苦してゐるときに本當に生き／＼した商賣の仕振りが小店の中にピン／＼して躍つてゐる。本當に氣持のいい位い胸がすく。

これからは圖体ばかりでは駄目です。芯が活きて居らなくては、生命濺たる意氣がなくては看板にもならぬ。「ぬけ殻」はいくら大きくとも立派でも、生きてゐる一尺の蛇にはかなはぬ。めい／＼が裏心から「生きてゐる」でせうか、グズ／＼で動いてゐるのではないでせうか。働くのでも「何に向つて」、「さういふ心」で働いてゐるかを反省した時、働いてゐるのでなくて、動いてゐることが多い、いやその動くことも出来なくて、干乾らびてゐるこが多し。

(尅)

目次	尅子
ぬけ殻	尅子
意識を超えた力	尅子
佛子の生活	土屋觀道
蜜丸經	中村辨康
念佛と生活	土屋觀道
吾朋便り	
旅日記	土屋觀道

意識を超えた力

□私達の腹の中は、慾や、腹立ちや、苦勞で一杯になつて居ります。□だから一杯詰つた塵溜箱のように、自分乍ら自分で自分のカラダが重苦しくて取り廻しがつきまぜん。恰度食過ぎた時のように胸先きが重苦しくて仕方がありません。斯うなつて来るは自分でさうともなりません。

□そんな時にこそお念佛と仕事です。お念佛と仕事をグ／＼勵むと、初めてカラダの中の垢ミよれとが汗となつて、一度に出て行つて了ふように感じます、そして身心が軽くなつて、浮き／＼して來ます。腹の中の濁りが透き徹つて、晴々して來ます。そして、我れ識らず愉快になつて顔までがニコ／＼して來ます。すると一層仕事も涉るし、一層元氣も出て來て前途も見透せるようになり、自信も加はつて來ます。

□たゞ此の第一の轉回が六つかしいのです、恰度泥濘の中へ深く喰ひ込んだ荷車の輪のように、仲々轍からゴロリと轉がり出ません、一つ廻り出たら占めたもので、その後は自然に可速度的に廻つて行きませんが、其一つが廻り出しません。そこがお念佛です、自分に判つてゐても、わかつてゐる通りになれぬ、なれぬ「情意の絶てぬ」ところは、念佛で絶つて頂くのです。理論と知の作用で行詰つた處は此の「行」で絶つより外はない。酒も飲んで悪い——飲みたくないときまでわかつて來ても、さて酒を見ると黙つて見遁せられぬ、その時さうして其酒を絶つか、「意識を超えた信」自覺より他ないので、その「自覺」はさうして起さるか、それは此の「行」より外ないので。

□仕事に没頭すると仕事に救はれる、仕事へ集中した力によつて他へ分散する力を統一して了ふ。此の強大な統一中へ他を消化吸収して了ふ、だから仕事に困つて他のゴタ／＼した厭な氣分が悉く燒却せられ淨化せられる。だから仕事に依つて萬事が忘れられ清々して來ます、仕事は一つの「行」である。然し宗教的「行」は、普通の娯樂や仕事なごの「行」とは違ふ、それ自らに正しい明るい「智」を持つて居ります、だから「正見」が基礎となつて正思惟、正語、正業、正命、正精進となつて行くのです。だから本當に歸命したお念佛でない、娯樂に外ならぬ。愚痴善きのお念佛、一時的熱狂のお念佛となつて「一路向上の信」とはなりません。

(尅子)



佛子の生活

土屋 觀道

□私は永い間、この佛子と云ふ自覺になれなかつた。神の僕と云ふよりもどれほど神の子と云ふことがよいことか、神の奴隷となるよりも神の子、佛の子としての生活がいかに輝かしいかは云はずして明なことである。

□乍然、『神の僕』と云ふことは僕が主の爲めには奴隷たる如く、神の律にそむかぬと云ふことを意味するならば神によつて造られ、神によつて治められる者として、神のおきてにそむかぬと云ふことを意味するので、金錢や名譽の奴隷となり、肉慾に捕はれてゐる人に比べてそれがどれだけ勝つてゐるかは云ふまでもないことである。

□『神の子』と『神の僕』と云ふことは此の意味に於て全く同じではないかと思ふ。たゞ若し異ふと云ふならば僕と子との異いである。けれども神の教へに順い、神の心に生ると云ふ點に於ては同じである。

□『神の僕』と云ふことがいやで、『神の子』と云ふことが好きである位ならばもとより金錢や名譽や肉慾の奴隷たることを好む人とははいはずである。

□乍然その實は神の如く清く、佛の如く慈愛に充つた生活を欲する人はあつても、其の實は金錢と名譽と肉慾の奴隷とたる人が多いのではないか、私には未だ此の點が本當にはつきりせない人が多かに見える。

二

□私は永い間佛子の自覺になれなかつた。尤、死にたくない、よくなりたいたと云ふ心はあつた。而もその爲めに、金錢も欲し、名譽も欲し、又肉慾もあるかに思へた。それは佛子たることを欲しないが爲めではない。

□然乍ら、若も佛子たることが金錢を捨て、名譽を無くし、肉慾をも斷たなければならぬものとするならば、それでも私共は佛子たることを欲したのであらうか。かう思ふと私共の本心はまだそこまでは行けてゐないと告白せざるを得ないものがあるではないか。

□『如來の御偉力と御恩恵とによつて活き働きあることを得たる我は此の身と心とのすべてを獻げて仕へ奉まらん』と、如來の御前に本當に言いうる人が幾人であらう。之は私共の常に反省して見るべき禮拜儀の一節である。

□世の中に善人にはなりたいたい、乍然善行は仕たたくないと云ふものがあつたらごんなものだらう、善い行のできる人の外に善人といふものはない。然に世には善人と云はれたい爲めに悪い事をさへする人がある。

□理論から云へば善人と思はれたい爲めや、善人と云はれたい爲めに悪いことまでして之を得たいほどならば、何故に人は本當に善い人となる爲めの善いことを思い、善い行いを爲すことをしないであらう。

□之は確に私共の誤りである。佛の子となると云ふことは佛のやうな行いのできる身となることであ

る。神の僕と云ふことさへ神の教へに従ふこと僕の如くと云ふことであるならば神の子たるものがどうして神の心に反いてよいものか。

三

□人格ある人とは人格ある行いのできる人を云ふのである。然に世の多くの人々はともすれば人格ある行をすることをしないので、たゞ人格者とのみ思はれたい人がある。乍然世に之ほど誤つた考へがどこにあらうか。之は私共の常に反省せなければならぬ一つの大きな事柄である。

□金銭が欲しいと云ふのもそれが私共の生活に効験し、私共の向上に意味を爲すが爲めと云はねばならぬ、従て、それ以外金銭の必要や尊さがどこにあらう。金銭の奴隷と云ふのは必要以上に金銭を求むる人を云ふのである。

□名譽にしても、肉慾にしても亦同じである。名譽とは名のほまれである。名と實と伴はぬ名譽と云ふものがどこにあらう。眞に名を愛し、譽を尊むものは神の前に佛の前に、眞に價値ある生活を爲すことが本當の名譽ではないか。

□だから、名譽と云ふことも此の意味から云ふならばそれは決して卑しむべきものではない、否むしろそれは何よりも尊むべく亦あがむべきものである。乍然世の多くの人々は神の前に自己を忘れて、たゞ人まへのみ虚榮を馳せる。肉慾の生活も亦同じである。

□肉慾と云ふことが人間の生活に於て、其の生命を維持する上に必要なことは云ふまでもない。その意味に於て、肉慾そのものを絶対に悪いと云ふものはない。釋迦も孔子もクリストもそれによつて生きたではないか。

□それにもかゝらず、何故に彼等は之を嫌つたのであらうか、それは云ふまでもなく、之によつて眞に生きるの人生の意義を忘れて、之等の生活に捕はれたからである。

□従て、肉慾を嫌ふと云ふのはその爲めに眞實の人生を忘れて、生存の意義を欠ぐが爲めである。肉慾そのものを罪惡視したのではなかつた。

四

□此の意味に於て、眞に生きる爲めならば肉慾も財慾もはたまた、名譽と云ふことも、決して惡とのみは云ふべきでない。要はたゞそれがどれだけ眞實の人生に効験するか否かにある。

□従て、眞實の人生にはある程度の人類の生活として、それを維持し、それを向上する意味に於て、そこに金銭や名譽や、肉慾の必要なことも、充分に認むべきである。

□然乍ら、それはたゞ吾人の生くべき手段であつて、その爲めに私共の眞の向上が妨げらるべきものではない。私共の生活は常に永遠の生命と無限の向上の生活である。而して、一切の罪惡は即ち此の考への轉到から始まる。

□此の意味に於て、私共が死にたくない、よくなりたいたいと心に願つたその願いが、いつしか肉慾と財慾と名慾とを止揚して、永遠の生命と無限の向上とに轉向して來るのである。

□永生の道と價値の生活とが即ちその人をして眞に人たらしめ、之を充たすに身命を辱するに至る。而して、此の活動が即ち眞の佛性の活動であり、眞人としての生活である。

□此の意味に於て、私共の生活はいつしか肉慾と財慾と名慾とを統御して、神の道、佛の道に全身の活動を献げて止まぬ喜びとなる佛子の自覺もこゝに立ち、眞人の生活もこゝに始まる。

□キリストが自らを神の子と云ひ、釋尊が私達を佛の子だと叫ばれたのも、此の意味からではなかつたか。して見れば私共の生活も今や佛子の自覺となり、眞人の一生活となるのが本當ではないか。私

蜜丸教

中村辨康

世尊が釋迦族の迦維羅城の尼俱律陀樹園に御居でになつた時の事でした。

世尊は朝早く城中へ行乞せられてから園に販り、食事をすまし其日の日中を完全にしやうと思はれて、林の奥に入り若いキルワ樹の元に曇さを避けられ御すはりになされました。

其時、釋迦族の一人なるダンタパーニはぶら／＼散歩に出て来て此林の中に入りキルワ樹の根元に坐禪して居られる世尊を見奉つて懇ろな挨拶をせられたのち、世尊にお尋ね申し上げました。

「沙門よ。あなたの御主張は何でありますか。何を御説きになるのでありますか。」

「友よ。私の主張と云ふのは天界、魔界、梵界、沙門婆羅門、人民、この一切人天の如何なる世界にも囚はれないで立つと云ふ事です。また樂欲にも執着せず、疑を離れ、孤疑を斷ち、有と無との渴愛を脱した修道人には最早や彼此の想は隨逐して來ないと云ふ事です。之が私の説く所のものです。」

ダンタパーニは分つたのか分らなかつたのか何にも云

はず唯だ叩頭しつゝ舌をまわし皺を額に寄せて立ち去りました。

世尊は其夜の集りの時、教團の人々に其話をせられました。

其時一人の比丘は立つて申し上げました。

「世尊よ。然し其天、魔、梵、沙門、婆羅門、人民此一切人天の如何なる世界にも囚はれず立つと云ふ世尊の教理は一体さう云ふ事を意味して居るのでありませうか。又樂欲に着せず疑を離れ孤疑を斷じ有無の渴愛を脱した修道人即ち世尊には彼此の想は最早隨逐しないとはさう云ふ事を意味して居るのでありませうか。」

「比丘達よ。何かの縁に依つて人には、調戲障礙の想が働いて來るものであるが、若し其處に我見と我所有欲とから來る喜び、樂み、戀着がなければ、貪瞋痴慢疑や我見所有見の終りであり、喧嘩、鬭争、口論、詭語、妄語の終りである。而して茲に一切の惡不善の法は残りなく消え去るであらう。」

かう御説きになつて世尊は御自分の部屋に御這入り

なりました。

「兄弟達よ。世尊は此教へを略説し給ふた丈で廣く意味を布演せず私室へ御飯へりになつたが、誰か此世尊の略説し給ふた説を廣く開演して呉れる者はないだらうか。」

かう考へたが、誰れの頭にも

「長老大迦旃延は師にも讃められて居り、同門の智者達にも尊敬せられて居る。而して彼は此世尊の略説せられた教へを廣く開演し得る人である。我々はかの長老大迦旃延の處へ行つて此意義を尋ねて見やう」と云ふ事が浮びました。

そこで比丘達は長老である大迦旃延の處に行き懇ろな挨拶を交はしたのち、此の事を御話したのでした。

迦旃延は夫を聞いて云ひました。

「友よ。譬へて見ると木の赤味を欲しい人が根や幹を乗越えて小枝や葉に夫れを求めやうとして居ると同様ではないか。長老達よ。あなた方はなぜ師を離れて私に此義を尋ね様として居られるのか。兄弟達よ。我々の師なる世尊は實に知る人の中の知る人であり、見る人の中の見人であり、眼其者、智慧其者、法其者、梵其者、唱道者、教示者、義の開顯者、不死を與へる者、法の主、如來で在ますではないか。なぜ先き程、

此義を世尊に問ひ奉り世尊の御説きになるのをよく憶持しやうとしなかつたのでしたか。」

「我々の友、迦旃延よ。我々も仰しやる通り世尊は知る人の中の知る人、見る人の中の見人、眼其もの、智慧其もの、法その者、乃至、法の主、如來で在ます事をよく存じて居ります。而して先程此義を世尊に問ひ奉つて世尊の御説明遊ばす通りに憶持し度つたのであります。然し長老なる大迦旃延もまた師にも讃へられ同門の智者にも尊ばれ、この世尊の略説し給ふに御教を廣く開演して呉れる事の出來る人でありませう。長老迦旃延よ。さうか、氣を悪くしないで我々の爲めに説明して下さい。」

「それでは友よ。よく聴きよく注意して呉れよ。私はそれを説くでありませう。」

比丘達は答へました。

「かしこまりました。」

迦旃延は語り出しました。

「友よ。世尊は略して説き給ふた。何かの縁に依つて人には調戲障礙の想が働いて來るものであるが、若し其處に我見と我所有欲とから來る、喜び、樂み、戀着がなければ、貪瞋痴慢疑や我見我所有見の終末であり喧嘩鬭争口論詭語妄語の終末であり茲に一切の惡不善

の法は残りなく消滅するであらうと。
私はこれに對してかう諒解して居ます。

兄弟達よ。先づ眼と物質とに對して眼識と云ふ者が起る。此の三者が接觸して感覺と云ふ者が起る。此の感覺から感受が起り、感受があれば認知があり、認知があれば思惟がある。思惟すれば分別がある。分別するから其縁に依つて、人に、過去未來現在の眼所縁の物質の上に、すべての調戲障礙の想が働いて來る。友よ。耳鼻舌身の場合も同様でありまた意の場合もまた同じであります。

そこで、再び眼の場合で云ふと、眼と物質と眼識とあるから感覺の生起があり、感覺の生起があるから感受の生起があり、感受の生起があるから認知即ち想の生起があり、想の生起があるから思惟の生起があり、思惟の生起があるから調戲障礙の想の作用が生起する。耳と聲、鼻と香、舌と味、身と觸、意と法この場合も之に均しいものです。

此故に眼と物質と眼識とが接觸しなければ感覺の生起は有り得ない。感覺の生起がなければ感受の生起も有り得ない。感受の生起がなければ想の生起も有り得ない。かくの如くして調戲障礙の想の作用も顯はれ得ないのではありませんか。

耳と聲、鼻と香、舌と味、身と觸覺、意と道理との場合も繰返す迄もなく之と均しいのです。

ですから我々は眼、耳、鼻、舌、身、意等の感官と、物質、音聲、香、味、觸覺、物理等の對境と其調和から成立して來る六識とを整理して、有るが儘に見聞し正しく取扱ふ可きだと思ひます。

元來眼と境と識との三の和合から來た感覺、感受、認知、思惟、了別を起して我見を生じ我所有欲を生ぜしめるからいけないので、夫れを有るが儘に正しく取扱つて行く丈ならば、茲に一切の惡不善の法は跡方もなく消え去るのは當然の事だと思ひます」

かう云つてから迦旃延は付け加へました。

「友よ。私は世尊の略説し給ふた教を開演して此様に諒解して居ます。然し長老達が望むならば世尊の御許に行き此義を問うて下さい。而して世尊の説き給ふ如く憶持して下さい」と。

比丘達の喜びは大變なものでした。誠に夜が明けた様にハツキリ分つたので大相喜びました。而して直ぐ様世尊の御許に行き世尊に拜禮してかう申し上げました。

「世尊よ。私達ほかの長老大迦旃延の許に行つて世尊の略説し給ふた義を尋ねました。長老迦旃延は私達の爲めに、このやうな調子にかう云ふ言葉で意義をハツ

キリと廣く開演して呉れました。私達は今大喜びで之を世尊に御報告に参りましたのであります。

「比丘達よ。大迦旃延は學者です。大智慧者です。もし私の處へ此の義を尋ねても此言葉以外の言葉では説明し得ないでせう。なぜなれば、これは眞の意味だからです。比丘達よ、之は其様に憶持するがよろしい」

常給仕者なる長老阿難は立つて世尊に申し上げました。

「世尊よ譬へば或る人が飢餓と疲勞とで死ねばかりに

念佛と生活

(一)

土屋 觀道

△「私は○宗の信者ですが、近頃あなたは念佛するものは病氣が癒り、金が儲かり、人格までが高まると云はれるさうだが本當ですか」

○「それどころか、念佛申せば未來までも救かると云ふのですよ」

△「未來のことまで御尋ねするではありません。念佛

なつて居た時、蜜丸を得たと致します。すると彼は味ふに従つて益々其甘美美妙な味を味ふ事が出來て愈々元氣付くであります。

世尊よ。志ある賢い比丘は此教に依り此智慧に依り益々此意を深める事に依つて愈々満足を得、心の喜を得ます事と存じます。

世尊よ此教を何と名付けませうか。

「阿難よ。そなたの譬へは當を得て居る。然らば之を蜜丸教と名付る事にしやう」 (中阿含蜜丸喻經)

申して未來に往生ができることとは私も異存はありません。然し念佛によつて、此の世の利益があると云ふのは私の承知のできないことです」

○「それはまたさうしたわけでありませう。私には反つてそれが判りませんよ。未來を救ふべきならば何故に此の世を救はぬでせう。それに本當の宗教の落つきは此の世を救ふ位だから未來も救ふべきだと云へるし、未來を救ふ位だから此の世も救ふとも云ふことが本當ではな

いでせうか。未來を救ふが此の世は救はぬとか、此の世は救ふが未來は救はぬと云ふやうなことが果して私共信ぜられる事とせうか」

△「それでも、念佛して淨土に往生の出来るのは彌陀の本願によるからです。念佛によつて此の世から救はれると云ふことは彌陀の本願にはないこととせう。而も念佛によつて病氣が癒るとか、金が儲とか云ふことは私共の宗旨では全く言はぬことです」

○「彌陀の本願と云ふ文面から嚴密に云ふならば、念佛して金が儲とか病氣が癒ると云ふことは或は云はない方が本當かも知れません。それは一切の衆生を死后に往生せしめると云ふことが本願の文面でもありますから。乍然それ位の大悲であるから、之によつて病氣も癒り、金も儲かると云ふことが何故悪いこととせう」

△「何故悪いかと云はるれば私も困ります。然し文面にもないことを云つては多くの人も迷ふし、又宗教をそんな現世利益に使ふと云ふことは反つて宗教の正しい意味を没却することにならないとせうか」

○「一應考へればそれも尤もです。乍然それがたとい本願の文面に言はれてないことであつても、確に念佛の信仰によつて、病氣も癒り、金も儲かる道理が其の中に伺へるものがあるならば今日のやうなセチカライ世の中に

は、大いに之を説いて世の人を利益するのがよいとせう

二

△「乍然それは大いに考へるものです。何となれば念佛の信仰はむしろ此の世を捨て、未來に往生を願ふのが從來の教へであつて、またそれが本當でありませう。それを今更ら本願の文面にもない現世利益を説くことは反つて世の人を迷はすことです。又未來の往生を仕損ずることにもなりません。それに肉慾や財慾や此の世の倫理道德なきは所謂有限の俗事であつて、人生の根本義から見れば全く取るにも足らぬ事とせう。然に淨土往生の問題は全く人生の根本に關するものでありまして。現世利益なきとは、決して同一に論ず可きものではないかと思ひます。加之、今日の多くの人々はかゝる現世利益を説かないでさへ、多くはそれに迷ひ易いのに、今更らそんなことを説かうものならば、それこそ大變だと思ふのであります」

○「私はまた、今日の佛教が振はぬのは此の現世をあまりに否定したからではないかと思つてゐます。それは此の世に生きんとしてもさうしても苦しくて生きられないやうな人々、若しくはあまりに此の世の生活が悲惨であつて此の世に生きることを欲しない人でない限り、此の

世を厭ふて未來を願ふと云ふことは到底あり得ないことであると思ふからであります。尤も佛に頼まなくて自分の力で健康であり金持であり、又道徳的生活である人は別であります。さうでなくして此の世に生きながらへ生き往うとする人は如來の御力と御恵みとによる生活が此の世の生活に關係ないとはさうしても考へることができぬのであります」

△「して見るとあなたの思想は現實生活の思想であつて未來生活の思想ではないですか」

○「さあそんなに私たちの生活を現世だの、未來だのと一方にのみ考へ切ることではできません。若し私共の考へを單なる思想と言ふ言葉で言ふならば過去と云ふのも未來と云ふのも、それは皆此の現實を離れて言ひうる思想はないのです。乍然それは單なる現實思想のみは言ふことはできぬので、其の現實の中には過去をも反省し未來をも考へに入れて働く現實の外に未來も過去もないのです。嚴密に此のことを言ふならば、たとい一步を譲つて未來往生と申しましても、其の實は現實を離れて未來往生も考へられるものでもなく、又現實を離れて未來往生ができるものでもありません。未來と云ふのも、此の

只今の現實が今のまゝに刻々と續いて行くところに今から言ふ未來が今の現在となつて現はれるのです。亦、未

來往生の決心がついたと言ふことも、只今の現實を外にしてあり得ないこととありますが、現在から未來のことと決定して、而もその爲めに眞に安心のできるのもやつぱり只今の此の現在即ち現實を離れてないではありませんか。して見れば從來の教そのまゝの往生極樂云々事も、又以つて此の現實の生活に關係なしとは云へぬのです。それをある人は念佛往生は未來往生の爲めのものであつて、現實の生活には無關係なものであると云ふ人がありますが、其はあまりにルーズな考へであります。

三

△「そんな意味での現實生活なら、私もそれが無いとは申しませぬ。乍然あなたの念佛に關する信仰はそれ以上に尙病氣が癒るとか金が儲かるとか人格が高まると云はれるさうではありませぬか」

○「あなたの信仰はそれが無いとおつしやるのですか」

△「無論さうです」

○「それはまた何故とせう。あなたも念佛の信仰が現實の生活に一つの安定を與えるものであると云ふことに御異存はなかつたやうではないですか」

△「それは勿論さうですが、あなたの考へとは可なりの相異があります。私の信仰では念佛によつて、此の世の

安穩を得ると云ふことは此の世の病氣が癒るとか或は金が儲かるとか云ふ意味の喜びや安定ではなくして、寧ろそれにも影響されない永劫の救いとして此の世の事變に禍いされない喜びであります」

○「然ば病氣とか經濟とか、人格問題についてはどう考へてゐられますか」

△「それは一口には云へないことですが、或は此の世の失策から來た病氣もありませう。又私共の此の世では知ることのできない過去世の罪報から來た貧困もあるかも知れませぬ。乍然かくの如きことは別に佛に願はぬでもよいことであり、またそんなことは之を願つたからとてそれを免がれることはできるものではありません。だから私共はできるだけだけの努力を以つて之を避けることのできるだけ避ける工夫をして、それ以上はこれを受けねばならないものとして之を受くるのです」

○「然ばそれらの業報は悉く自分自身に受けなければならぬのですか、それとも死後に往生を逐げればそれらの罪報は免かれるものとするのでせうか」

△「それは私も知りませぬ。然乍ら、我宗で教ゆるところは若し此のまゝで私共が信仰なくして死ぬならばそれは永劫に此の罪報を受くべきです。乍然彌陀の淨土に往生すればそれを受けずにすむと云ふのです。それはたと

い淨土に往生したからと云つて已に作つた罪が無くなるのではないのですが、淨土と云ふ所に之を起すべき縁がないので、遂にそれを受くことがないと云ふのであります」

○「そんな説明は私も聞いたことがあります。そして又そんな考へも一往は尤もだと思へる点もあります。乍然それが今世に於てではなく、たゞ死後に往生してからのみであると云ふことが私の合点のいかぬ点であります。若も死後に於て、それがあつたらば今少しくそれが此の世に於て何故無いでせう」

四

△「それは此の世と淨土との境涯が違ふからです。此の世は凡夫の所住であり、穢土の世界であります。生身の体のある限り之を受けざるを得ないのです。然に淨土は如來の淨土として本願に酬いた淨土であり、生身の体もなくなつた後のところでありますから、肉慾も起らず、又金錢の必要もない故、それらの煩惱も起るの縁がないのであります」

○「それでは急いで淨土に往くべきに、何故に多くの人は行かないでせう。そこに何かの矛盾があるではないですか、私は多くの念佛行者たちがあなたの云ふやうなですか」

ことを言い乍ら、何故に早く死ないかを不思議に思つてゐる一人であります。或る人はそれは凡夫だからだと言ふ人もあります。けれどもほんじうに貴下の云ふやうでしたら、一刻も早く死んで淨土に行くのが本當ではないでせうか。それができぬのは貴下の御説もさうかと思ふのです。而も此のことは私もかつては悩んだことがあります。乍然それは淨土と云ふことを死後の淨土とのみ思い違えた私の誤りであつたのです。本當の淨土は時間や場所の問題ではなかつたのに」

△「……………」

○「然ば眞の淨土とはいかなる所である。またそんな淨土へはいつさうして行かれるか。こんなことを考へたこともあります。否それを求むるのが私の淨土教に對する眞剣なる研究であつたのでした」

△「そして其の結果はさうなりましたか」

○「そのことについては先月の「眞生」誌上にも厭欣心に就て述べておりますからそれを見て下さい」

△「何か一口に云へないでせうか」

○「云へないこともあります。乍然それは私に云へても聞く人に判るかは問題です。それは已に深い先入主として多くの人々に誤まれてゐるものがあるからです」

△「でも往生極樂は死後と云ふのが從來の教へではない

○「それもあなたの云ふ通りです。殊にそれがあつた封建の時代に起つた關係上、それらの人の爲めにわざ／＼起つた彌陀の本願であり、淨土教であるために之を此の世からの往生と云ふことが云へなかつたことも無理からぬ点があります。而もその當時に於ては反つてそれが多くの民衆には解し易く、又其の方が生活し易かつたと思ふのです。而して其の實その信仰によつて多くの人は未來往生と聞き乍ら、返つて、其の現實の苦を救つてゐたのであります。此の世に於てまゝならぬ人々はそれによつて安らぐより外に全く仕様がなからず。乍然人間の本质は單なる未來生活を以つて満足することはできません。従つて少しでも此の世に於て自由ができるものならばそれを求むるのが本當であります。否少くともそれが今日の私共の本心の願ひであります。従つて私共の實際生活はさうしても此の世の生活を罪惡生死の世界であるとして捨てることができぬのです。而して若し此の世の現實生活を否定することができぬならば此の世の生活に必要な人間の生存をさうして惡むことができませう。之が佛教でも殺生を以て最も大なる罪惡とする所以であります。一人の罪惡と云ふものは私共の生活に於て必要なものを毀損するほゞ大きな罪惡はないの

です。否少くともその他に私共は罪と云ふ罪は考へることができぬものではありませんか」
△「それは私も同感であります」

五

○「若しさうならば、私共の信仰が此の世の生活を妨げるものであつてはいけないわけです。又それと同時に私共の此の世の生存を否定するやうな考へや生活も眞の意味に於てあり得べきものではないかと思ふのです」
△「然ば今までの厭離穢土欣求淨土の如き思想はさう理解すべきことではせう。今の御言葉とはやゝ趣きが違ふではありませんか」

○「それは淨土と云ふことを單なる未來や他方土に置くからです」
△「然し今までの淨土教では淨土を他方土に置き往生を未來にしたではありませんか。そして此の世は無常であり又娑婆であるとして捨てるのが今までの見方では無つたでせうか」

○「無論私もさうであつたかと思ふのです。然乍らそれは封建時代に於ける一般佛教徒の考へであつて、今日の見方はそれに一步を進めたものでなくてはならぬかと思ふのです。眞の淨土は阿彌陀佛の世界を云ふので、法藏

菩薩の本願に酬いて現はれた世界を云ふのです。穢土とは凡夫の心境を云ふのであつて、貪瞋痴の煩惱の對境を云ふのです。だから、普通穢土と云へば凡夫の立場から此の世を指して云ふ爲めにそれを煩惱心の働く上に現はれた世界を云ふのです。若も悟りを開いた佛の心に影する世界から云へば此の土は即ち淨土であります。従つて之を穢土とは云へないのです」
△「それは尤な云い方です」
○「つまるところ、彌陀の淨土と云い、凡夫の穢土と云ふことは、其の人の所住の境涯の清淨なるか否かを指したもので必ずしも時と處とに固定すべきものではないのであります」
(以下次號)

(四、八、一一滙して一〇、一二再校
一一、一、三校。一一、二、改稿)

我は目に見えぬ
香りの如く
目に見えぬまゝに
我家の中、人々の間を
薫り匂はす
馨りならばや
——(克)——

吾朋
便り

○柏崎町原吉郎様より
此中大清水大泉寺の御別時には如例御懇篤なる御指導に預り以御陰道友一同僅か三日間でありましたが、近來稀なるシツクリした落ち着きのある會合でありましたので共々歡喜に充たされ踴躍して下山致しました事を謹んで御禮申上げます。

○越後 山賀實三様より
先日は大清水で久方ぶりに御尊姿を拜しゆるみかけし心の桶に新らしきタガを掛けていただいた様な感じがしまして歡喜躍動に堪へません。

思へば一昨年の五月、宮の下の佐藤様御宅で始めて御話を承り始めて見し信仰の形式に入り、今迄私の頭にあつたアキラム的宗教は一轉して喜びの生活となり感謝の念沛然として起り、更に向上の道を進るべき方向に進みつく／＼如來の大慈を感じ得る事が出来ました。(私は以前解脱といふ事は一切の俗事を放擲し社會と絶縁状態となる事と思つてゐました。)

爾來私の實生活と健康状態さには今迄とは打つて變つた形があらわれました。
○佐屋在家念佛堂 黒宮平八様より
先日は御手紙頂き難有く嬉しく拜見仕候 永らく御無沙汰致し居り候。朝夕はよほご冷氣相加はり候今日此頃御上人様御一同様には御きげんよく御勵みの條何よりに奉存候 降て私方一同無事歡喜中に暮し居り候 乍憚御安心被下度候
○神奈川縣 長安寺様より
今回は夢の如き御法施賜はり難有幾重にも奉拜謝候。舊習の法要にて難務多端の爲め缺禮のみ仕り多罪御仁恕被下度候 其後御法牀如何に被爲渡候誠に御自愛奉祈候。

○見附町 今井善吉様より
其後は御無沙汰致しました。御上人様始め皆様にはおかわりありませんが、御伺ひ致します。拙宅では一同慈光裡に働かせて頂いて居ります。當地では毎日雨ばかり降りまして困つてゐます。
○岐阜縣西黒野 所 基様より
扱過日は揖斐町三味會御執行の初日は夜御懇篤なる御教示を蒙りまして、誠に

難有御座いました。最早實感云々申上る餘裕はありません。上人様のお話の言々句々悉く皆私の心の中に潜む煩惱の働きの候儘の實状でありまして、ほんごうに表面人前は奇麗な装ふもこれを赤裸々に致しましたら逆ものことにお断しになりませむ。如來様を欺く假面を被りたる毒むしであります。

旅日記 土屋親道

一 越後

廿日の夜行で越後に直行しました。二十一日の朝鉢崎に着いて、小雨の中を三四十名の道友と共に大清水に登りました。寺は眞言宗の寺ですが、地方で有名な觀音様が安置されてあります。僅に三日間の別時でしたが、日頃からの計畫でもあつたのか集る人には皆熱心な人ばかり、普通の集りの五日間にもまじた喜びでした。宿込みか四十三名、総人員七十餘、近所の村人を集めたら更に幾名かを増したことでせう。景色も山上のこととて非常によく、その靜かなのこ、見ばら

しのよいのと、氣候に申分がないのと、道友の熱心さとは道友一同の心からなる満足であつた。寺の御住職も非常な喜びで之を迎えて頂いたことは限りない感謝でした。二十四日朝下山し、一應柏崎を訪れて小憩し、夕刻の汽車で岐阜の方へ出發した。

二 岐阜長源寺

長源寺の集りは二十六日から五日間でした。昨年一度御約束したのを御断りしてゐたので、今度出た序でを以て御訪ねることにしたのであります。かれて眞宗の盛んな所と聞いてゐたので、今度の集りはどうかと思つてゐたのに、豫想は之に反して、雨降りにもか、わらず非常の集りであつた。念佛を申すと云ふことが木魚を打たくので中にはとつくりせぬ人もあつたかと思ふが講話の点では可成りの共鳴者ができたかと思ひました。それに集る同志も各地からであつて、大垣、岐阜、名古屋、津島、津島、津島、津島、津島、津島等の遠近の人々で一時秋期の大會でもあるかにさへ見えた。東京の神谷、伊

勢の谷口の御兩氏も見えました。

三 四日市

神戸の方へ行くのを大垣の都合で四日市の方へ變更した。前日電報を打つて置いたので一家も大喜びでした。裏畫頭着いたが講演は夜だけでした。製陶所の發展は限りない喜びですが、慈光の裡に常に向上して頂きたいと願はない時はなかつた。二日は午後から土地の小學校で一般への公開講演會を催した。雨降のとき、突然の思立ちの爲めに集る人は少なかつたが、「人生の生くべき道」について語つた。夕方から伊勢參宮を思い立つた。

四 神宮參拜

丁度二日は遷宮式だ云ふので汽車賃まで割引した位である、とても山田の町には宿客で一ぱいで宿されまいと思つたので松坂に宿るつもりであつたが、車掌の勧めに任せて山田まで乗り込んだ。中野(新一郎)、八鳥、神谷、谷口の四氏と私の五人連でした。吸暖園と云ふ宿に自動車走せ、中野氏の紹介で無理に宿

めて頂いた。參宮は之で二度目である。前年に比べて今度は一層祖國の大廟と云ふ氣がして嬉しかつた。祖廟そのものより祖廟と云ふ民族的背景の氣分と、大廟そのもの、自然の神域が何とも云へぬ一種の氣分を今更のやうに味はさせたやうでした。汽車賃なんかは半額にしてでもよから全國の我民を此の地に參拜せしめたいものだと思つた。

五 伊勢の大石

伊勢の大石は谷口年泰氏の御宅です。私は之で三度目ですが、近頃中野善英氏と神谷善之進さんが度々行かれて御話があるとのこと、初めに比べて土地の人々が非常に喜んで頂くことは全く感謝の極みでした。大へんな雨降りでしたのに、集る人々は二階に畧一ぱいでした。念佛する人も可成りに多いやうです。さすがに一家の道に對する努力はえらいものだと感心しました。村人も今は之を喜びとして頂く云ふことですよ。

六 大阪と尼ヶ崎

大阪に出たのは四日の午后でした。夜

八 名古屋

名古屋は九、十の二日でした。初日は朝から念佛と法話、夜は座談會です。幹部連のいづれにも變らぬ喜々とした活動の様が涙にもじむ嬉しさですよ。此の地も久々の集りの事と珍しく多勢の集りでした。二日目は御別時念佛會です。夜は市會議員の選舉開際と云ふので百々様の發起で、堀先生と中野さんと私の三人でそれについての話でありました。

九 清水と静岡

十一日は朝の准急で静岡に着きました。法月さんを訪れて更に粟生さんを御訪ねました。神谷(善)様も一緒でした。別して取立てるほどの話はないが、かうして語り合ふことの樂を忘れることができません。夕方からは神谷さんと二人で清水の實相寺さんを訪ねました。何を語つたか夜も遅くまで床につくの忘れでゐました。十二時頃に床についた事と思ひます。翌日も亦朝中は殆ど話ばかりでした。午後は再び静岡に出て、粟生さんの案内で藤井先生のあさを御訪ねしま

一〇 焼津

焼津の集りは雨も降るのに、風まであるのでどうかと思つたのに、其の集りは案外に多かつたのでした。殊に青年の人々が可成りにあつて熱心に質問など出たので一層皆も緊張しました。人数は少いが八九の道友の熱心さには實は動かざるを得ないものがあります。夜も十時半頃になりました。之から今一度清水の鈴興さんや、沼津の辻さんなども御訪ねしたくてなりませんでした。一面急に歸りたい氣分もしますので少々困りました。

一一 歸京

夜行で焼津を立ち、十三日早朝家に歸りました。一家の喜びは響物がありませぬ。美智子と長子は寢床から飛び起きて

の集りにはまだ早いのでいつもの本屋に寄りました。大正大藏經の阿含部(上下)が手に入つたは何よりの喜びでした。豊嶽での集りは、全く道友のみの集りでした。案内が間に合はなかつたさかで其の数は少ないが意志の一致は百千の集りにも勝る力です。熱心さと光ある先途であります。

七 大垣

大垣の集りは八日の朝からでした。私は大垣から朝の急行で直行しました。こゝも久々での集りで岐阜や掛妻、黒野などからまで集つて頂いたのは私の限りない喜びでした。相變らずの熱心な道友のまごころが何はれまします。夜は休みさとして桑原様方で宿て頂きました。淺野馬淵の御兩氏が御出で下さいました。

来ました。光道も駈け出して膝の上に乗りました。喜びの涙に迎えてくれる妻の心も感謝でした。旅の疲れも忘れたやうです。之からはまた暫くは勉學の人となるでせう。二階の一室には静に私の歸るのを待つてくれるペンと紙とがあるやうです。讀みたい本も集つて居ります。

一二 旅の思ひ出

以上私の旅の集りの日記にすぎません。乍然今かうして學寮の二階で筆をれば旅の思出でがそれからそれと思ひ出されてならないのを覺えます。今度の旅こそは初めのほどはいやと云ふを引出されたやうな形でしたが、愈々それを腹をきめて出で見れば、至るこゝろに道友の歡待がいつしか私をして旅のつらさを忘れ

させました。やつぱり出た方がよかつたのだ、あゝしていつまでもすまぬすまぬで出ることを氣がれしてゐるよりもかうして出てしまつて見れば、又限らない喜びがかうして湧いて来る。やつぱり出た方がよかつたのだ、之も道友の温い切なる厚意なるものだから佐藤その御厚志を感謝するものもありました。

序で乍ら各地の道友、幹部の方々に重ねて厚く御禮を申します。之からまた暫くは勉學にかゝります。何卒御休神下されたい。(四、一〇、三〇)

因に先月の二十四日から四五日の間浦賀、吉井、八幡と行つて参りました。彼の地の道友も亦健在です。(四、一一、三、追記)

○誌代拂込並寄贈者御芳名

○拾圓 岐阜井深重義様、福岡中田學純様、神戸關浦恒様、全藤村源三様。○六圓 大垣某女様。○五圓 神戸藤村よね様、京都専攻庵様。○參圓 三重光徳寺様、岐阜林重太郎様、大垣服部一男様。○貳圓 和歌山尾上光純様、佐世保富田泰介様。○壹圓 神奈川奥津喬次郎様、新潟嘉瀬きよ様、京都栗山政三様、大垣渡部ちやう様、岐阜遠藤道子様、辻高子様、岸野菊太郎様、伏見儀七様、辻儀作様、村瀬はすむ様、淺野政一様、保井忠男様松坂い様、三重 村木右工門様。

八二〇〇

價定誌本

一部 金十錢 郵税共
 中年 金六十錢 全
 一ヶ年 金一圓 全

註文の注意

◆購讀希望者は代金を添へて御申込下さい
 ◆誌代は總て前金御拂込の事
 ◆送金は振替によるのが便利
 です

昭和四年十一月十日印刷納本
 昭和四年十一月十二日發行 行

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼 土屋 觀道

編輯人 土屋 觀道

名古屋市西區隅田町二二番地

印刷人 百々治之助

名古屋市中區鍋屋町二丁目

印刷所 龍山田活版印刷所
 電話東(4)三六五・七五五

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社
 振替口座東京四七二八八番

(大正十四年八月十三日)

昭和四年十一月十日印刷納本

(毎月一週二日發行) 第八卷 第九號